

県中教研 英語部会だより

第 35 号

発行日 令和2年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 矢野 清一
題 字 金山 泰仁 先生

Try する勇氣

主任指導主事 穴田 涼子

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたアクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善を推進することが求められています。静かに教師の話聞き、黙々とノートを取り、ともすると1時間に一度も言葉を発せずに終わる授業形態は、今、大きく変わろうとしています。

英語科は、コミュニケーション力を身に付けることを目標に、実は以前からアクティブ・ラーニングを実践してきたのではないかと私は思っています。学習課題について自分の意見をもち、ペアやグループになり、友達と意見を交わし、試行錯誤の中で課題を解決していくアクティブ・ラーニング。それはまさに、欧米の授業展開そのものです。彼らは幼い頃から、そのような授業でコミュニケーション力が鍛えられています。全く臆せず次々と手を上げて発言し、それに対するレスポンスもどんどん返ってきます。その間、教師が発言することはほとんどなく、ファシリテーター的な存在になっています。

新しいことにtryするのは、勇氣がいらいます。しかし、やるなら新学習指導要領の全面実施が行われる今です。CHANGEはCHANCEを待っている。今こそ、英語科から、今までの実践を踏まえて、授業展開の変革を発信していくときだと思っています。

今年度、日本語を介さずに英語のまま教科書の内容を理解することを目標とした授業が研究大会で提案されました。「こうなってほしい」という教師の強い思いは生徒に伝わり、それが生徒の活動に繋がり、アクティブ・ラーニングの視点に立った素晴らしい授業が行われていました。教師は、この授業を仕組むにあたって、きっと、不安があったことでしょう。しかし、教えることはtryの積み重ねです。何度も何度もtryして、そのたびに調整をし、よりよい授業を目指していくことこそが、新学習指導要領の求める授業改善に繋がるものと信じています。

(東部教育事務所)

令和3年度に向けて

部長 矢野 清一

令和3年度、中学校新学習指導要領が完全実施になります。今回の改訂は私達英語科教員にとって他教科とは比較にならない程の変化をもたらします。以下に令和2年度中に押さえておくべきことをまとめてみます。

1. 校区内小学校との連携

来年度は小学校新学習指導要領が完全実施となり、小5、6年では「教科書を用いた授業」が始まります。移行期間中は学習した内容に小学校間で差が見られたかもしれませんが、今後はある程度「粒のそろった」状態で中学校に進学してくることとされます。小学校での学習内容を中学校の学習に円滑に接続するためにも、校区内の小学校からこれまで以上に情報収集し、入学してくる生徒が何を使って学習し、どんなことが出来るようになっているのかを把握しておく必要があります。また、中学校の次期教科書(R3)は、小学校で扱った語句や表現が既習事項として含まれるなど、掲載内容が大きく変化する可能性も十分に考えられます。いずれにせよ、小学校で使用される教科書の内容を熟知しておかなければなりません。

2. 英語の使用を中心とした授業設計

新学習指導要領ではこれまでの4技能が4技能5領域となり、英語を即興的に「話すこと〔やりとり〕」が重視されています。10月の研究大会でも、英語を使用する目的、場面、状況を教師が巧みに設定し、生徒が即興的な英会話に果敢にチャレンジしている授業を数多く見ました。生徒が「英語を使って何が出来るようになるか」、そのために教師は「何をすべきか」、我々英語科教員には大幅な意識改革というチャレンジが求められる令和2年度になるのではないのでしょうか。

If it doesn't challenge you, it doesn't change you. 「Challenge」の中にChangeがある。」

(高・志貴野中)

第63回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、入善町立入善西中学校を会場に、水野愛美教諭とALTマフィ・レッド ファルン・ジョンソン先生による1学年の研究授業が行われた。

「入社面接で会社に来てほしい人材を探す」という場面設定のもと、面接官役と入社希望者役とで役割を変えながらインタビュー活動を行った。ウォーミングアップからモデル提示、ペア練習までの流れがテンポよく行われ、生徒たちは生き生きと活動していた。インタビュー活動では、異なる8社についての情報が用意されており、生徒はその会社に合った人材を選ぶため、またその会社に選んでもらうために、積極的にやりとりしていた。また、ワールド・カフェ方式を取り入れたことで、最初は緊張していた生徒も、回数を重ねると自信をもって話せるように変容した。全体として、スモールステップの手立てを踏みながらも、話すことにおける生徒の意欲を高めるための場面設定の工夫がなされた授業であった。

部会協議①では、研究授業でのよかった点や疑問点等について、付箋を用いて話し合った。東部教育事務所の青山拓也指導主事より、「必要感がある課題を設定する」「教師によるモデルの提示や中間評価をその後の活動に生かす」「内容を深めるために会話をつなごうとする生徒の姿勢を大切にする」等、貴重な助言をいただき、今後の指導改善に向けて、大変有意義な研修会となった。

部会協議②の研究発表では、滑川市英語部会から「プレゼンテーションソフトを用いた授業実践」と題して、研究の成果についての報告があった。ICTを用いた生徒の興味、関心を高める授業展開の具体的な実践例が紹介された。また、ICTの活用は、現実感や臨場感のある言語活動にするためにも効果的なツールの1つであると再認識できた。

山口紗里依（黒・高志野中）

■富山地区

富山地区大会では、富山市立堀川中学校を会場に、坂下静香教諭とALTカール・ゲルセン先生による1年生の授業、牧田泰卓教諭による2年生の授業、吉野友香里教諭による3年生の授業が行われた。

1年生では、生徒たちがALTとJTEの実演やイラストを参考にしながら、教科書本文の内容を把握することを目指した活動に取り組んだ。2年生では、学校近辺にあるお薦めの場所を、ALT役のペアの生徒に伝える活動を行った。次時に実際にALTと対話するというゴールがあり、本時ではそれに向け、生徒たちは工夫を重ねながら英語でやり取りをしていた。3年生では後置修飾を用いて京都の観光地を紹介する活動に取り組んだ。各班を旅行会社に見立て、ALTに観光名所をプレゼンテーションするという状況を設定し、英語を使う必要性をもたせていた。

どの学年においても、コミュニケーションを行う目的、場面、状況等を設定し、生徒が自分の意見や考え等を伝えることができるように指導する場面がみられた。また、生徒の学習意欲を喚起する指導方法が工夫され、「～できる」という明確な学習課題の提示と相まって、主体的な学びのある授業だった。

指導助言者の方々からは「言い換えたり、ジェスチャーを使ったりするなど、何とか伝えようとする気持ちが大切」「言語活動の繰り返し、定着につながる」等、貴重な助言をいただき、指導改善のために得ることの多い研修会となった。

広島県立安芸府中高等学校長の平木裕先生による講演では、英語における主体的・対話的で深い学びに向け「コミュニケーションの目的・場面・状況の明確化」「ペアやグループによる活動の重視」「豊富なインタラクション」等の留意すべき点についてご教示いただいた。

有澤 健（富・山田中）

【研究主題】 コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか。
ー 四技能を総合的に育成するための言語活動を通して ー

■高岡地区

高岡地区大会では、高岡市立高陵中学校を会場に1学年高田洋平教諭、2学年川堰仁美教諭とALTローシン・モンカム先生による研究授業が提案された。

1学年では、家族や友達の名前、ニックネーム、その由来を紹介する英文を書く活動を行った。帯学習としての単語練習やモデル英作文等、多くの場面で電子黒板を活用し、学習内容を可視化したことで、どの生徒にとっても分かりやすく、テンポのよい授業が展開された。

2学年では、自分が就きたい職業や夢について、まとまりのある英文を発表する活動を行った。帯学習として行われていた即興的なスモールトークの内容を発表内容に加えている生徒もおり、個→ペア→グループの活動で話す内容や表現がよりよいものとなっていった。

両学年の授業ともに、生徒が目指すべき姿を分かりやすくモデル提示され、ゴールに向けての帯学習が有効活用されている授業であった。

部会協議①では、授業の視点を絞り、付箋を用いた少人数グループによる意見交換が行われた。ALTとJTEがそれぞれ何を目的にどのような働きかけをするべきか、生徒から引き出す内容と教師から与える情報のバランス、苦手な生徒への手立ての在り方等について話し合った。また、指導主事の先生方より、1つの単元で伸ばしたい力を教師と生徒が共有した年間単元構想、目的・場面・状況を意識した言語活動、小学校の既習事項を生かした中学校での授業改善等について助言をいただき、学びの深い協議会となった。

部会協議②では、広島県立安芸府中高等学校長の平木裕先生より「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善、CAN-DOリストや学習評価に係る校種間連携を柱とし、単元目標や学習内容の系統性、指導方法の継続性等を考慮し、小・中・高の学びの連続性を意識して、年間指導計画を作成すること等について教えていただいた。

岩田 圭佑 (射・射北中)

■砺波地区

砺波地区大会では、砺波市立出町中学校を会場として、石崎直亮教諭とALTルシネ・ヤゴビアン先生による2学年の研究授業が行われた。

相手を替えながら、メモを頼りに自分が「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で体験したことについてスモールトークをするという活動であった。英語を話す意欲を育てるため、間違いを恐れずに、メモを元に即興で話す活動に力を入れていた。自分が体験したことについて、知っている語彙を活用して表現する活動をしていた。最初は、話す内容が少なかった生徒も、繰り返しスモールトークをすることで、自信をもって豊かな表現内容で言えるように変容していった。生徒自身が成長を実感でき、達成感を味わうことができた。

部会協議①では、授業のよかった点や改善点等について付箋を用いてグループで話し合った。西部教育事務所の越井寿雄主任指導主事からは、「全国学力・学習状況調査を受けての授業改善」「スモールステップで言語活動を何度も繰り返す」「即興でのやりとりを継続させる3つのポイント『(1)実現させたい対話をイメージさせる』『(2)継続的に取り組ませる』『(3)相手に聞き返したり、確かめたりするなど聞き手を指導する』」等貴重な助言をいただいた。

部会協議②の研究発表では、小矢部市英語部会から「『英語教育における小中連携取組事例』について」と題し、児童生徒の交流学习の実施（合同授業やスピーチビデオの作成および視聴）や、小学校教諭の中学校英語科の授業参観、中学校教諭による小学校6年生への出前授業の実施等、定期的に行っている取組事例を紹介していただいた。各校区ごとの継続した研究で成果が上がっており、実りの多い研修会となった。

武村 美幸 (南・城端中)

各地区の取組から

高岡市中教研「本年度の取組から」

高岡市中教研英語部会では、9月に行われる研究大会、2月に実施する市英単語コンテスト、研究推進委員会が中心となって進める事例研究、市教育センターと連携して開催する「イングリッシュセミナー」の4つの取組を中心に活動している。

今年度の研究大会は、高岡市立中田中学校を会場に、山田直毅教諭とALTレリョロサ・サラメイ先生による3年生の授業が行われた。電話での対話の場面を取り扱い、「ALTに電話の内容を伝えるために、メモを取りながら正確に聞き取ろう。」という学習課題の下、目的・場面・状況を意識した言語活動が展開された。山田教諭があえて英語の苦手な生徒役を演じるデモンストレーションや多目的教室を衝立でいくつかのブースに分け、実際の電話の場面に近づける環境づくり等アイデアあふれる提案授業となった。メモを頼りに即興でやりとりする生徒や「電話で内容を伝える」という言語活動の目的を意識しながら対話する生徒が多くみられた。西部教育事務所の横山恵指導主事からは、提案授業に対する指導助言に加え、「CAN-DOリストの活用」「言語活動の充実」「小中連携の必要性」について講話をいただいた。

夏休みに行われるイングリッシュセミナーは、今年度で8回目となり、今年は8月26日(月)に開催した。小学校6年生各校2名ずつ、中学校2、3年各校2名ずつ、伏木高校生12名、高岡市勤務のALT10名や引率教員など合計146名が参加した。中学生による自分たちの校区紹介や伏木地区の歴史的建造物等をグループで巡る「伏木ウォークラリー」等、英語を用いて異校種の児童生徒やALTと触れ合うよい機会となった。

研究推進委員会が中心となって進める事例研究や市英単語コンテストは数十年間継続している取組である。これらの地道な取組が市内の先生方の授業力向上と生徒の英語力の向上に寄与している。今年度の事例研究は「即興的な言語活動」や「小中連携した取組」について全会員から事例を集め、冊子とデータを全校配布する予定である。

今後は新学習指導要領の全面实施に向け、小中連携を一層図り、さらなる言語活動の充実に向けて研究を進めていきたい。

豊原 正貴(高・戸出中)

氷見市中教研「研究授業を通して」

氷見市英語部会では、「コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのようにしたらよいか」という研究主題の下、様々な場面を設定したQ&A活動等の帯活動の効果的な指導法の工夫や、生徒が即興で質問をし合うことを意識した言語活動の指導の工夫について研究を進めている。

9月には、氷見市北部中学校を会場に、山崎拓郎教諭とALTキーラン・オースティン先生による3年生の授業が提案された。「相手が好きな有名人等について、詳しい情報を聞き出そう。」という学習課題を設定し、生徒がペアで、間接疑問文や既習表現を用いてインフォメーションギャップを行ったり、有名人等についてグループで質問し合う活動を行ったりする授業であった。生徒が楽しく必要感をもって、好きな有名人等の情報を聞き出す活動ができるよう、導入前のQ&A活動が工夫されており、全体がつながりのある授業展開となっていた。Q&A活動でワークシートを見ずに自然に会話を楽しんだり、間接疑問文を用いて繰り返し相手に質問したりすることで、次第に自信を付けて活動をしている生徒たちの様子が見られた。また、ALTの積極的な机間指導により、グループ活動が活性化されていたことも印象的であった。

西部教育事務所の越井寿雄主任指導主事からは、「Q&A活動を継続し、自分の思いや考えを伝える活動に発展させる重要性」や「導入において、すぐに生徒に文型や語順の違いについての気付きを求めるより、まずは内容を理解させるために繰り返し相手に聞かせること」、「目的や場面、状況を設定し、生徒が自分で、何を伝えるか(内容)、どんな語句・表現を使うか(英語)の両方を思考・判断して表現する言語活動の充実を図ること」等が大切であると助言をいただいた。今後の授業改善をしていく上で、大変有意義な研修となった。

吉國 京子(氷・西條中)

射水市中教研「本年度の取組から」

射水市英語部会では、研究主題に基づき、研究授業を実施し、各学校での日頃の実践事例の工夫や中教研学力調査や全国学力学習状況調査の結果等について情報交換し、研究を進めている。

9月に射水市立小杉南中学校を会場に、服部貴史教諭とALTサラ・カタロニア先生による1年生の授業が行われた。本時は新学習指導要領の話すこと[やり取り]に関連し、即興で自分の意見や感情等を伝え合いながら、会話を継続・発展させる活動が展開された。まず、帯学習として、表現をJTEの後に続いてリピートで確認した後、ペアでQ&Aを行った。その後、ALTとJTEによるモデル会話を聞いて、本時の学習の最終到達目標の姿を知り、What _____ do you like?の表現を用いて、自分と相手の好きなものとその理由等について相手と即興で問答する活動を行った。中間発表では生徒一人生徒一人ALTの対話が行われた。他の生徒の発表から学んだ語彙や表現を、その後のペア活動において生かしている生徒もいた。1時間の中で生徒の発話量がとても多く、テーマを変え、即興でのやり取りを繰り返すことで、授業終盤ではどの生徒も自信をもって、意欲的に活動に取り組んでいる様子が見られた。

研究授業後の協議会では、付箋を用いて授業のよかった点や改善点等について話し合った。Q&Aで出てきた表現や小学校外国語活動で慣れ親しんだ表現を即興でのペア活動において活用している生徒がいたという意見があり、フィードバックの方法と工夫、単元計画の吟味、小中の学びの接続等について議論し、話し合いが深まった。

西部教育事務所の横山恵指導主事からは、言語活動において大切なこととして①目的、場面、状況が明確であること。②伝える内容と使う英語の両方を工夫すること。③自分の考えや気持ちを伝え合うこと。④ターゲットセンテンス以外の英語も扱うこと。の4つについて貴重な助言をいただき、今後の指導の改善について実り多い研修会となった。

岩田 圭佑(射・射北中)